

灰河経(雑阿含 1177 経)の梵文原典と和訳

—〔附〕原型カンギュルのチベット語訳テキスト—

松田 和信

イエンス = ウヴェ・ハルトマン*

1. はじめに—大乘莊嚴経論における灰河経

今となつては随分記憶も曖昧であるが、本稿共著者の松田がまだ大谷大学の院生の時であったように思う。当時、短期大学の助手をされていた小谷信千代先生（現在大谷大学名誉教授）と『大乘莊嚴経論 (Mahāyānasūtrāṅṅkāra)』の第 14 章「教誡教授品 (Avavādānuśāsany-adhikāra)」を世親と安慧の注釈も含めて一緒に読んだ。ちょうど 10 歳年上の「小谷さん」は、松田にとっては最も信頼し、何でも話せる親しい先輩であったが、40 年経ってもそれは変わらない〔と思う〕。小谷さんはその後、第 14 章の解説成果を『大乘莊嚴経論の研究』と題する自著として出版した（小谷 1984）。その第 14 章の中で「煖・頂・忍・世第一法」の四善根位（順決択分）を説く第 23-26 偈の、最初の煖位を説く第 24 偈に示される「法の明かり (dharmāloka)」の語に対する注釈において、世親は次のような経文⁽¹⁾に言及する。

ayaṃ sa āloko yam adhikṛtyoktaṃ kṣāranadyām | āloka iti dharmanidhyānakṣānter etad adhvācanam iti | 『灰河 (Kṣāranadī)』の中で、それについて「明かり (āloka) とは、それは法を簡択する忍 (dharmanidhyānakṣānti) の言い換えである」と説かれるが、それがこの〔第 24 偈に言う〕「明かり (āloka)」のことである。

*Jens-Uwe Hartmann

(1) Lévi 1907: 93. なお以下は小谷 1984: 164 からの引用ではなく、松田による和訳。

現在では、この引用を論文で取り上げる研究者は、誰もが、まるで周知のことのように、これが『雑阿含』1177 経（灰河経）のフレーズであると書いている。しかし当時は、松田にも小谷にも典拠不明の引用であった⁽²⁾。「灰河 (*Kṣāraṇadī*)」とは一体何なのか。これが経名であるなら、どの經典なのか。しかし本稿を書くに当たって、念のため小谷の本の第 24 偈に対する注を確認すると、何と『雑阿含』の該当箇所が注記されている⁽³⁾。これは一体どういうことか。小谷に尋ねたが、もはや忘却の彼方にあることで何も覚えていないという。そこで改めて少し調べると、答えは簡単であった。シルヴァン・レヴィによって 1907 年に梵文テキストが出版された『大乘莊嚴経論』の該当部分では、この引用は不明と注記されているが (Lévi 1907: 93, n. 1), 梵文テキストに続いて 1911 年に出版されたフランス語訳の方では、大正蔵刊行前の時代であるから、『大日本校訂大蔵経』に収められた『雑阿含』の該当頁が注記されていたのである⁽⁴⁾。小谷と一緒に読んだ時には、フランス語訳まで見たとも思えないが、出版にあたって小谷はそれを確認したということであろう。我が国の研究者のほとんどは、レヴィのフランス語訳を見ることなく、恐らく小谷の著書に基づいて、これを『雑阿含』1177 経（灰河経）の引用としているのではないかと思われる⁽⁵⁾。

話はこれで終わらない。それから 15 年ほど後のことである。アフガニスタンのバーミヤーン渓谷で発見され、ノルウェーの実業家マーティン・スコイエ

(2) 家捜しすると、当時の松田の手書きノートと、小谷のノートのゼロックス複写が出てきたが、この箇所では典拠にかかわることは何も書かれていない。なお、両者のノートには日付がどこにも記されていない。何をしても日付は残しておくべきであろう。

(3) 小谷 1984: 205-206 参照。正確にいうと、小谷は注記で『雑阿含』の『灰河経』と断定しているわけではなく、それと関係があるように思えると述べているだけである。なお、*Kṣāraṇadī* は小谷の本文と注記では『灰河経』ではなく、『鹹河経』と表記されている。

(4) Lévi 1911: 166, n. 26. レヴィは Tōk. XIII, 4, 51b; le passage cité est à la col. 15 と注記する。Tōk. XIII, 4, 51 は『大日本校訂大蔵経』第 13 卷「小乗経第四分冊」(弘教書院・東京 1882) の五十一丁裏から始まる『雑阿含』の『灰河経』を示し、col. 15 は『大乘莊嚴経論』の引用文が現れる箇所を指す。『大日本校訂大蔵経』の該当箇所確認には大谷大学の上野牧生氏の手を煩わせた。

ン (Martin Schøyen) 氏にその大部分が買い取られた大量のインド語仏教写本に
対する解読研究プロジェクトに、松田は本稿共著者のイェンス＝ウヴェ・ハル
トマンと共に深く関わってゆくことになる。⁽⁶⁾1997年の秋、オスロ近郊のスコイ
エン邸を最初に訪れた時、貝葉と樺皮写本の山を前に、松田は『大乘莊嚴經
論』の引用句に見られる「法を簡訳する忍 (dharmanidhyānakṣānti)」の語が書かれ
た複数の写本断簡に気づいた。紀元5世紀に遡ると思われる東方系のグプタ・
ブラーフミー文字で書かれた古い貝葉写本の断簡であった。調べると、それら
の断簡は『雑阿含』1177経ではなく、大衆部教団が伝承したと思われる別な阿
含經典 (Caṅgī-sūtra) を書写した写本の一部であった。その後、dharmanidhyāna-
kṣānti は阿含經典ではことさら特異な語ではないことも知ることになったが、
当時の松田には、忘れかけていた『大乘莊嚴經論』の引用に含まれる語と同じ
語がバーミヤーン出土写本に現れたことは一種の驚きであった。その後、断簡
はオスロのトルケル・ブレッケ (Torkel Brekke) とハルトマンが担当して解読研
究が行われ、『スコイエン・コレクションの仏教写本』の中に出版されている。⁽⁷⁾

話はさらに続く。スコイエン邸での写本調査から20年以上経った2018年の
夏、松田はハルトマンを誘って、11世紀にアティシャ (Atiśa, Dīpaṃkaraśrījñāna)
によってインドからチベットに将来されてポカン (sPos khang) 寺に伝えられた、

(5) 日本の研究者すべてがそうであると言っているわけではない。例えば、榎本
1984: 101において、榎本文雄氏は『大乘莊嚴經論』の引用が『雑阿含』1177経 (灰
河経) であると明言している。榎本 1984は小谷 1984と出版年が同じであるから、
榎本氏は論文執筆時に小谷の本を見てはいない。榎本氏に確認したところ、小谷と
違って記憶もはっきりしていて、dharmanidhyānakṣānti を考究した早島理 1982の中
で、『灰河経』について「寡聞にして不明」とある記述に反応して、自身で『雑阿
含』1177経に探し当てたもので、レヴィの注記は知らなかったという。長尾雅人先
生も小谷から本の寄贈を受けていたであろうから、それによって知った可能性もあ
るが、長尾先生は間違いなくレヴィのフランス語訳を見ていたと思う (長尾文庫・
長尾重輝 2007: 267-268)。なお、漢訳『大乘莊嚴經論』を国訳した袴谷憲昭・新井
裕明 1993: 165上では「出典については未詳」と注記されている。

(6) バーミヤーン写本研究の経緯とその出版に関わる紆余曲折については松田 2020c
に詳細を述べた。

(7) Brekke 2000, Hartmann 2002 参照。

全部で116葉からなる貝葉写本を一緒に読み始めた。問われても、その写本を読み始めた合理的な理由は説明できない。写本のごく一部の文章はポカン寺で写本を見たラーフラ・サーンクリトヤーヤナの調査報告書にすでに紹介されていたが、実際に写本写真を取り寄せてみると、直ちに何やら他とは違う重要文献のような雰囲気を感じ取ったからとしか言えない。写本に書かれている文献は「三啓経 (tridaṇḍa)」を40種集めた『三啓集 (Tridaṇḍamālā)』であった。三啓経は阿含經典の前後を複数のアシュヴァゴーシャ (馬鳴) 作品偈で挟み込んだ読誦文献であり、その編纂は2世紀のアシュヴァゴーシャ自身に帰せられるというが、それを証明することはできない。40種の三啓経のうち、奇遇にも、27番目に置かれた三啓経が『大乘莊嚴經論』の世親釈で引用される『雜阿含』1177経そのものであった。『灰河経』が蘇ったのである。これによって、これまで漢訳しか存在せず、松田と小谷にとって40年前には全く正体不明であった引用經典の梵文原典全文が回収可能となった。

2. 第27三啓経としての灰河経

40種の三啓経とその構造については本稿末の参考文献に挙げた松田とハルトマンの既稿を参照していただきたい。本稿では再説しない。ここで取り上げる第27三啓経は、三啓経の基本に従い、第1ダンダの13偈と第3ダンダの8偈によって第2ダンダの阿含經典を挟み込む構成となっている。その内容構成を示せば以下の通りである。

第1ダンダ

- 第1-3偈 三婦依偈
- 第4-12偈 アシュヴァゴーシャ作品偈 (出典不明)
- 第13偈 經典導入偈

第2ダンダ 灰河経 (*Kṣāranadī-sūtra*) = 雜阿含 1177 経

第3ダンダ

- 第1-6偈 アシュヴァゴーシャ作品偈 (出典不明)
- 第7-8偈 ブツダの教えを讃える定型偈

第2ダンダの『灰河経 (Kṣāranadī-sūtra)』はその書誌も内容も注目に値する經典である。従来は漢訳『雜阿含』の第1177経としてのみ存在が知られ、パーリ語三蔵にも対応経は見出されていなかった。⁽⁸⁾従って、『灰河経』は恐らく説一切有部教団独自の阿含經典であったと思われるが、最近になって新たな知見もたらされた。チベット語訳も存在したのである。本稿末にローマ字テキストを紹介するが、デルゲ版や北京版のような版本のチベット大蔵経ではなく、西ヒマラヤに写本の形で伝えられた二つの原型カンギュル (Proto-Kanjur) の中に『灰河経』が収録されていたのである。

さらに内容的にも、『大乘莊嚴経論』の引用とは別に、この經典は研究者の間でも注目されてきた。本稿で示す漢訳第11節に「菩薩摩訶薩」の語が現れるからである。この經典では、灰河の比喩を用いて、菩薩がブツダとなる修行道が説かれている。極めて異例な仏伝經典とも言えるが、この教説が持つ意味合いとその評価については、各氏によって複数の研究が公にされている。⁽⁹⁾しかし、梵文原典が明らかになると、そこには「菩薩」の語はあっても、大乘經典に見られるような「摩訶薩」の語は存在しないことが分かる。これは漢訳資料の限界と言えるかもしれない。後述チベット語訳も梵文と同じである。ただ、『灰河経』は成立の遅い阿含經典ではあろうが、説一切有部教団の伝承した『雜阿含』に含まれる經典の中では、漢訳『雜阿含』で判断する限り、ブツダの前身としての菩薩の語が現れる唯一の經典であることは確かであるから⁽¹⁰⁾、梵文

(8) 第27三啓経としての梵文テキスト以外に、中央アジア出土の梵文断簡が存在する。大英図書館のヘルンレ・コレクション (Hoernle Collection) に含まれる紙写本の小断簡 (Or.15014/370) が『灰河経』の断簡であることが、ハルトマンへの個人的情報として、クラウス・ヴィレー (Klaus Wille) から知らされているが、現時点では未出版。断簡には103の葉番号が残るが、文章としてはごく一部が回収されるのみである。ヴィレー博士の出版を俟ちたい。

(9) 『灰河経』に現れる「菩薩」の語を最初に取り上げたのは西義雄 1975: 165 であったと思われる。西は平川彰 1968: 144-145 がそれに気づいていないことを指摘している。なお、平川彰 1989: 245-247 では西の指摘を受けて『灰河経』も取り上げている。能仁正顕 2002: 194-195、藤田祥道 2005: 28-31、三枝充恵 1981: 97-98 も参照。『灰河経』が内包する諸問題については藤田祥道 2005/2006: 28 ff. に詳しい。松田和信・出本充代・上野牧生 (他) 2022: 73, n. 76 も参照。

原典の出現によって、この問題についてのさらなる研究の進展が期待される。

さらに、ここで注意すべき点は、『灰河経』には兄弟経典とでもいうべき経典が存在することである。それが漢訳『雑阿含』では『灰河経』の五つ前に置かれた第1172経の『毒蛇経 (*Āśviṣa-sūtra*)』である。使われる比喩も似ている。両経典はいずれも先に「河 (*nadi*)」を介在にして修行道を暗示する比喩が説かれ、ブッダ自身がそれを教義的な語に「言い換え (増語 *adhivacana*)」を行って解説するという体裁の経典である。さらに両経典の比喩には、ストーリーだけではなく、文章や単語自体にも多くの共通点が見られる。例えば、経末の節では、両経とも同文の定型句が使われているが、漢訳『雑阿含』で後に置かれた『灰河経』では文章が省略されて、『毒蛇経』を参照するように述べている⁽¹¹⁾。なお、三啓経としての『灰河経』では省略は行われていない。『毒蛇経』の方にはパーリ語三蔵に対応経典が存在することから、古い『毒蛇経』を元に有部教団で新たに作成された経典が『灰河経』であったとの推定もできる。興味深いことに、『三啓集』に含まれる40種の三啓経のうち、第26三啓経がこの『毒蛇経』である。『灰河経』は第27三啓経である。両経は『三啓集』の中でも並んで置かれているのである。『毒蛇経』の梵文テキストと和訳はすでに出版されているので⁽¹²⁾、本稿と併せて両経典に対する原典資料が揃うことになる。

ところで、*Kṣāranadi* を名乗る経典は、『雑阿含』1177経以外にも、何らかの大乘経典として存在したようで、それに基づいた龍樹に帰せられる讃歌

(10) なお、『雑阿含』巻23の第604経には「菩薩」の語が複数現れるが(杉本卓洲 1964: 166, n. 8 参照)、この箇所は漢訳された後に巻次が乱れて一部が失われ、その欠落部分に『阿育王経』がはめ込まれた箇所であるから、本来の『雑阿含』の文章とは関係がない。従って、数に入れる必要はない。この箇所以外に、漢訳『雑阿含』の中で菩薩の語が現れるのは確かに『灰河経』の一箇所だけである。

(11) この箇所について平川彰 1989: 245 は、『灰河経』の全体が『毒蛇経』に「順じて説かれたことが示されている」と言っているように見えるが、そういうことではない。経末の定型句が『毒蛇経』と同文であるからここでは省略すると言っているだけである。本稿末の漢訳を提示するところで改めて述べる。

(12) 第1ダンダと第3ダンダのアシュヴァゴーシャ作品偈を含む第26三啓経(毒蛇経)全文の梵文テキストと和訳はすでに松田らによって1年前に出版されている。松田和信・出本充代・上野牧生(他)2022 参照。

(*Sattvārāḍhanastava*) が梵文とチベット語訳で伝えられ、津田明雅氏によって詳細な研究が発表されている。⁽¹³⁾ こちらの『灰河経』は今なお正体不明である。ただ言えることは、「灰河 (*kṣāranadī*)」はよく知られた十六小地獄のひとつの名称でもあり、別文献のタイトルに同じ語が含まれていてもおかしくはない。はっきりしたことは何も言えないが、その大乘経典は『雑阿含』1177 経とは特段の関係はないのかもしれない。⁽¹⁴⁾ なお、津田氏の研究に先立ってハルトマンもその讃歌のテキストを出版している。⁽¹⁵⁾

3. 第 27 三啓経のアシュヴァゴーシャ作品偈

前項で見たように、第 27 三啓経では『灰河経』を挟んで、三帰依の 3 偈とブツダの教えを讃える定型の 2 偈を除いて、第 1 ダンダに 10 偈、第 3 ダンダに 6 偈の、計 16 偈のアシュヴァゴーシャ作品偈が配されている。これらの偈は既存のアシュヴァゴーシャ作品には見出されない。ただ手掛かりがないわけではない。第 1 ダンダの第 13 偈は第 2 ダンダの『灰河経』を導入するために置かれた偈であるが、梵文テキストと和訳を紹介すると以下の通りである (Ms. 70r3)。Śikharinī (17 × 4) 調の韻律で綴られている。

yathā vaidyas samyak prakṛtim avagamyāturagatām
kṣayārthaṃ vyādhīnām kathayati hitān auśadhavidhīn |
vicitrām sattvānām prakṛtim avagamyāśayagatām
tathā buddho dharmaṃ sadṛśam avadad bheṣajam iva || 27.1.13 ||⁽¹⁶⁾

例えば、医者 (vaidya) が、病人に現れた (āturagata) [症状の] 本質 (prakṛti) を

(13) 津田明雅 2011a, 2019: 161-169, 418-439. 津田氏は津田明雅 2011b において『灰河経』の正体を追求して『大乘莊嚴経論』の引用も取り上げている。

(14) 全くの無関係ではなく、すでに失われたが、『雑阿含』1177 経の大乘経典ヴァージョンが存在した可能性は残しておくべきかもしれない。

(15) Hartmann 2007 参照。偶然と言って良いのかもしれないが、松田は『大乘莊嚴経論』の引用を出発点として、ハルトマンは自身が出版したバーミヤーン出土断簡に含まれる *dharmānidhyānakṣānti* の語を出発点とし、龍樹に帰せられた讃歌を経由して、本稿における *Kṣāranadī-sūtra* の共同研究に至ったということが言えるかもしれない。

正しく知って、病気の回復 (kṣaya) のために益のある (hita) 薬草の類 (auśadhavidhi) を語るように、同様に、ブッダは、有情たちの意向に含まれる (āśayagata) さまざまな本質を〔正しく〕知って、〔医者が〕薬を〔語るように〕ふさわしい法 (dharma) を語る。

この偈と前半部がそっくりな偈が『ブッダチャリタ』に存在する。第26章73偈がそれで、内容は沙羅双樹の下で死に瀕したブッダが周りの者たちに語る教えの一部である。第26章の梵文原典は失われているので、チベット語訳と対応すると思われる梵語を推定して和訳を示そう。⁽¹⁷⁾

sman pa rang bzhin yang dag legs par shes nas ni ||
nad pa rnams la dam pa'i sman ni brjod bya ste ||
de yi dus kyis sbyar bar nges par bsten pa la ||
nad pa gang de bdag po yin te sman pa min || *Buddhacarita* 26.73 ||

医者 (sman pa; *vaidya) が〔症状の〕本質 (rang bzhin; *prakṛti) を正しく (yang dag legs par; *samyag) 知って (shes nas; *avagamyā), 病人 (nad pa; *atura) たちに最上の薬草 (sman; *auśadha) を語るが (brjod bya ste; *kathayati), それを時に応じて服用するのは病人自身であって、医者ではない。

後半部は文章が異なるが、前半部は「益のある (hita)」に当たる語が「最上の (dam pa)」に変わっているだけで、趣旨も単語も一致し、第26章73偈前半部に単語をいくつか足し、Śikhariṇī 調の韻律に変えて改作すれば第1ダンダ第13偈の前半部になるように見える。⁽¹⁸⁾ 逆に言えば、『ブッダチャリタ』第26章73

(16) これと同じ偈は第20三啓経第1ダンダ末の經典導入偈 (20.1.12) としても置かれている (Ms. 47v1)。

(17) 第26章のチベット語訳については、ローランド・シュタイナー (Roland Steiner) の校訂本 (未出版) から引用する。チベット語訳からのジョンストンの英訳 (Johnston 1936), および最近講談社学術文庫に収められた梶山雄一博士・御牧克己博士らの和訳を参照した。梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己 1985。第26章のチベット語訳からの和訳を担当されたのは御牧克己博士であるが、御牧博士は第73偈を「医者〔病〕の本性を正しくよく知って後、病人たちに適切な薬を告げるであろうが、それ〔薬〕を時に応じて確かに服用するのに責任があるのは病人であって、医者ではない」と訳している。

偈の前半は第1ダンダ第13偈の韻律を変えた短縮形であると言える。このような例は『三啓集』に含まれる他の偈でも多く明らかとなっている。⁽¹⁹⁾ いずれの場合も、松田もハルトマンも、いくつかの証拠を挙げて、それらの偈は元はアシュヴァゴーシャの失われた『莊嚴經論 (Sūtrālamkāra)』の偈であって、アシュヴァゴーシャ自身によって他の作品のために改作された偈であると推定した。ここでもそれと同じことが言えるのではないか。つまり、経典導入偈といえどもアシュヴァゴーシャの失われた『莊嚴經論』から借用された偈であった可能性が高いように思う。

40種の三啓経の第1ダンダと第3ダンダに置かれた偈は、当然のことながら、いずれも第2ダンダの阿含経典を解説したり讃歎したりする偈が選ばれている。第27三啓経でも『灰河経』の内容を解説、あるいは解釈するような偈が並んでいる。それらの偈をここですべて紹介する余裕はないが、その中から、複雑な構成を持つが、Śārdūlavikrīḍita (19 × 4) 調で綴られた2偈 (第1ダンダ第4偈-5偈) をその典型例として紹介しよう (Ms. 69v2-4)。

toyaughe maraṇaṃ bhavaty aniyataṃ naikāntato vidyate
kleśaughe tu nṛṇām adāntamarāṇaṃ niḥsaṃśayaṃ vidyate |

toyaughe patitasya cetasi bhaved duḥkhapravṛttir na vā

kleśaughe patitasya duḥkham atulaṃ kāyasya cittasya ca || 27.1.4 ||

洪水 (toyaugha) には不確実な (aniyata) 死があるが、必ず [死が] あるわけではない。しかし、煩惱の洪水 (kleśaugha) には、人々にとって制御不能の (adānta) 死が疑いなく (niḥsaṃśaya) 存在する。洪水に落ちた人は、心 (cetas) に苦しみの生起がある場合もない場合もあるであろう。[しかし] 煩惱の洪水に落ちた人は、身体 (kāya) と心 (citta) に比べようもない苦しみ [の生起が疑いなくあるであろう。]

vegodbhrāntajalā nadī jalaṇidhiṃ kiñcit kadācin nayet

(18) 無論、意味が同じチベット語の単語であるからといって、梵語の単語まで同じであるとは限らないことを分かった上での推定である。アシュヴァゴーシャ作品を読むとそのような例は多く見られる。

(19) 松田 2020b, 2021b, 2022b, 2023, Hartmann & Matsuda Forthcoming 1 参照。

samsārāṇavam arṇavād api param ṭṛṣṇānādī karṣati |
paryāptim samupaiti parvatanādī meghāgame cāmbubhir
vistūrṇair api ṭṛptim eti viṣayair na tv eva ṭṛṣṇānādī || 27.1.5 ||

激流 (vega) で乱れた川は、何でも何時でも海 (jalanidhi) まで導いてゆくであろう。〔しかし〕渴愛の川 (ṭṛṣṇānādī) は輪廻の激流 (samsārāṇava) を海 (arṇava) からさらに他〔の世〕に運んでゆく。雨雲がやって来る時、山から〔流れ出る〕川 (parvatanādī) は水によって満杯 (paryāpti) に至る。しかし、渴愛の川は拡大された対境 (viṣaya) によって決して満水 (ṭṛpti) に至ることはない。

この2偈は煩惱と輪廻を川と海に喩えて説いているが、無論『灰河経』を解説する偈だからである。灰河の喩えが輪廻を象徴することを言っているのであろう。この2偈から1偈を挟んで、その次には、輪廻の川 (海) を渡った向こう岸を説明する印象的な偈がふたつ配されている。韻律は Vasantatilakā (14 × 4) 調に変わる。その2偈も紹介しておこう (Ms. 69v4-5)。

yasmin na janma na jarā na rujo na mṛtyuḥ
śleṣo 'priyair na ca na ca priyaviprayogaḥ |
nāprāptir asti viṣayasya ca kāṅkṣitasya
tan me sukhaṃ matam ato 'nyad avaimi duḥkham || 27.1.7 ||

生まれること (janma) もなく、老いること (jarā) もなく、諸々の病 (ruj) もなく、死 (mṛtyu) もなく、嫌いな人 (apriya) と交わることもなく、好きな人 (priya) と別れることもなく、欲しがった対境 (viṣaya) の不得もないところ、⁽²⁰⁾そこが安楽であると私は思う。それ以外のところは苦であると私は知る。

gatvāpi pāram udadher bahusaṃśayasya
syāt śvāpādāgninīpacauragataṃ hi duḥkham |
saṃsārasāgarajalasya tu pāram etya
duḥkhaṃ susūksmam api nāsti parā ca śāntiḥ || 27.1.8 ||

(20) 涅槃を何らかの空間的、場所的なものとみなす理解は『ブッダチャリタ』第15章45偈にも見られる。松田和信 2020a: 39 参照。そこで注記したように (同 39, n. 28) 『ウダーナヴァルガ』にも同様のことが説かれる。従って、これは必ずしもアシュヴァゴーシャ独自の傾向とは言えない。恐らく当時の一般的な認識であろう。『ウダーナヴァルガ』については松田和信 2011: 23-24 参照。

多くの危険 (saṃśaya) のある川 (udadhi) の向こう岸に渡っても、猛獣 (śvāpada) や火 (agni) や王 (nṛpa) や盗賊 (caura) に由来する苦しみがあるだろう。しかし、輪廻という大海 (sāgarajala) の向こう岸に渡れば、わずかな苦しみもない。〔それが〕究極の寂靜 (śānti) である。

ここでは第1ダンダから4偈を紹介したが、偈はさらに続き、次の偈 (27.1.9) では、ブッダが説いた修行道 (mārga) なくして輪廻の大海を渡ることが不可能であることが示されて、偈は最初に紹介した第1ダンダ最後の經典導入偈 (27.1.13) に続いてゆく。

ここで紹介した4偈についても、そのスタイルと内容、あるいは単語の用い方から判断して、經典や律文献に現れる偈とは全く様相が異なる偈であり、これらの偈が他文献の中で論名や著者名を明記して引用されることは全く知られていないが、元は『莊嚴經論 (Sūtrālamkāra)』に含まれる偈であったと松田もハルトマンも強く推定している。無論、「弥勒・無著・世親の複合体」に由来する4-5世紀の『大乘莊嚴經論 (Mahāyānasūtrālamkāra)』などではなく、2世紀の仏教詩人アシュヴァゴーシャの『莊嚴經論』である⁽²¹⁾。

(21) アシュヴァゴーシャの『莊嚴經論』は現存しないが、カーヴィヤ調の韻文で著された阿含經典解釈論であったと思われる。なお『莊嚴經論』そのものと類推されるトルファン出土の梵文断簡も最近発見された (Hartmann & Matsuda Forthcoming 2)。『莊嚴經論』の性格については、上野牧生 2015: 203-234 参照。上野氏も述べているが、想像を逞しくすれば、この書は当時のインドではあまりにも著名で、僧侶であれば誰もが暗唱したアシュヴァゴーシャ作品のひとつではあったが、大乘經典とは無関係の阿含解釈論であったため、それから200年後に、そのスタイルとタイトルを模倣し、兜率天の弥勒菩薩からの啓示という体裁を取って、無著によって大乘ヴァージョンの『莊嚴經論』が韻文で著され、弟の世親が散文の注釈を書いた。それが『大乘莊嚴經論』であると言えるのではないか。つまり『大乘莊嚴經論』の意味は「大乘經の莊嚴」ではなく、「大乘の莊嚴經論」である。なお鳩摩羅什訳の『大莊嚴論經』(大正藏 202 番)も「馬鳴菩薩造」とされるが、実際はクマーララータ (Kumārālaṭa) の『喩蔓論 (Kalpanāmaṇḍitikā Dṛṣṭāntapankti)』の漢訳であって、アシュヴァゴーシャの『莊嚴經論』とは何の関係もない。

4. 梵文テキストと和訳

以下に『三啓集』写本に基づいて校訂した梵文テキストと和訳を提示する (Ms. 70r3-72r2)。便宜上、全体を 19 節に分割した。第 12 節が本稿の起点となった『大乘莊嚴經論』の引用である。和訳は節毎に付ける。校訂に当たっては、写本に一般的に見られる書写生の書き癖や些細な誤写はすべて正規形に戻したが、いちいち注記しない。ただし内容理解を左右すると思われる写本の修正については注記する。代用アヌスヴァーラもすべて断りなく修正し、ダンダも文脈に沿って任意に削除・付加した。なお、ハルトマンは本稿に先立って、*Kṣāranadī* に関わる資料を分析した論攷を公にしているが、その中で、以下のテキストのうち、第 10 節から第 15 節の冒頭部までを英訳とチベット訳を附して紹介している (Hartmann 2022b)。

§1 *eva*^(70r4)*m* *mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān chrāvastyāṃ viharati jetavane 'nāthapiṇḍadasyārāme | tatra bhagavān bhikṣūn āmantrayate sma |*

このように私は聞いた。あるとき世尊はシェラーヴァステイ (舎衛城) のジェータ (祇陀太子) の林、アナータピンダダ (給孤独長者) の園 (祇園精舎) に留まっていた。そこで世尊は比丘たちに言った。

§2 *tadyathā bhikṣavaḥ kṣāranadyāḥ kukūlakūlāyāḥ kaṇṭakopāstarāṇyā andhāyās tamaso 'ndhakāratamisrāyā mahājanakāyo 'nusrota uhyate |*

比丘たちよ、例えば、岸辺 (*kūla*) に熱灰 (*kukūla*) が⁽²²⁾あり、棘 (*kaṇṭaka*) で覆われ (*upāstarāna*)、暗く (*andha*)、闇 (*tamas*) であり、黒闇 (*andhakāratamisrā*) [そのもの] である灰河 (*kṣāranadī*) の流れに従って多くの人々が運ばれている。

§3 *tatra syād ekaḥ sattvo 'bāljāṭī*^(70r5)*yo 'mūḍhajāṭīyaḥ saprajñajāṭīyaḥ sukhakāmo duḥkhapratikūlo jīvitukāmo na martukāmo maraṇapratikūlaḥ | tasyaivaṃ syāt | kiṃ punar aham anayā kṣāranadyā kukūlakūlayā kaṇṭakopāstarāṇyā*⁽²²⁾ *andhāyā tamasā andhakāratamisrāyā*⁽²³⁾ *anusrota uhye | yannv ahaṃ hastābhyāṃ pādābhyāṃ*⁽²⁴⁾

(22) Ms. *kaṇṭakopāstarāṇyā*.

(23) Ms. *andhakāratamisrāyā*.

(24) Ms. *yanv*.

pratisro(70v1)to vyāyaccheya | sa idaṃ pratisaṃkhyāya bhūyasyā mātrayā hastābhyāṃ
pādābhyāṃ pratisroto vyāyacchate |

そこで、愚者の類いではなく (abāljāṭīya), 愚鈍の類いではなく (amūdhajāṭīya),
智者の類いで (saprajñajāṭīya), 安楽を望み, 苦を厭い, 生きようと欲し, 死のう
と欲さず, 死を厭う一人の有情がいるとしよう。彼はこのように考えるとしよ
う。「なぜ私は, 岸辺に熱灰があり, 棘で覆われ, 暗く, 闇であり, 黒闇 [その
もの] であるこの灰河によって, 流れに従って運ばれているのだろうか。いま
や私はもっと頑張って両手両足で流れに逆らって [進むべく] 努めよう。」彼
はこのように思案して, もっと頑張って両手両足で流れに逆らって [進むべ
く] 努めるのである。

§4 sa tatra paśyed ālokaṃ | tasyaivaṃ syāt | mahāndhatāyāṃ⁽²⁵⁾ viśeṣo 'dhigato yaduta
ālokaḥ | yanv⁽²⁶⁾ ahaṃ bhūyasyā mātrayā hastābhyāṃ pādābhyāṃ pratisroto vyāyaccheya |
sa idaṃ pratisaṃkhyāya bhūyasyā mātrayā hastābhyāṃ (70v2) pādābhyāṃ pratisroto
vyāyacchate |

そこで彼が明かり (āloka) を見て, 彼はこのように考えるとしよう。「大きな暗
闇の中で特別なもの (viśeṣa) が得られた。すなわち明かりだ。いまや私はもっ
と頑張って両手両足で流れに逆らって [進むべく] 努めよう。」彼はこのよう
に思案して, もっと頑張って両手両足で流れに逆らって [進むべく] 努めるの
である。

§5 sa tatra paśyet samaṃ pṛthivīpradeśam | sa tatra pratiṣṭhet | sa tatra pratiṣṭhāya
caturdiśaṃ vyavalokayet | sa tatra paśyen mahāśailaṃ parvatam akhaṇḍam acchidram
asusiraṃ saṃvṛttam ekaghanam | sa tam abhirohet |

そこで彼が平らな地面 (pṛthivīpradeśa) を見るとしよう。そこで彼がとどまると
しよう。そこで彼はとどまって四方を見渡すとしよう。そこで彼は, 完全
(akhaṇḍa) で無欠 (acchidra) で隙間がなく (asusira) 丸くて (saṃvṛtta) 一塊の
(ekaghana) 大きな岩山 (mahāśaila) を見るとしよう。彼はそれに登るとしよう。

(25) Ms. mahāndhatāyam.

(26) Ms. yanv.

§6 sa tatra paśyed aṣṭāṅgopetaṃ pānīyaṃ śītaḷaṃ ca svādu ca laghu ca mṛdu ca svacchaṃ ca (70v3) niḥpūtīgandhikāṃ pibataś ca kaṇṭhaṃ na kṣiṇōti pītaṃ ca kukṣiṃ na vyābādhate | sa tatra snātvā ca pītvā ca vīgatajvaro vīgataparidāhas tam eva mahāśailaṃ parvatam abhirohet |

そこで彼は八支を備えた水 (pānīya 八功德水) を見るとしよう。⁽²⁷⁾ (1) 清涼で (śītaḷa) (2) 美味で (svādu) (3) 軽快で (laghu) (4) 柔軟で (mṛdu) (5) 清らかで (svaccha) (6) 悪臭を離れ (niḥpūtīgandhika) (7) 飲んでいる人の喉を傷つけず, (8) 飲み終わった腹を痛めない [水] を。そこで沐浴して, [水を] 飲んで, 熱を離れ (vīgatajvara), 熱悩を離れた (vīgataparidāha) 彼は, その大きな岩山に登るとしよう。

§7 sa tatra paśyēt sapta puṣpajātāni tadyathā utpalaṃ padmaṃ kumudaṃ puṇḍarīkaṃ saugandhikaṃ mṛdugandhikam atimuktam eva saptamam | sa tāny eva sapta puṣpa^(70v4)jātāny upajighraṃś tam eva mahāśailaṃ parvatam abhirohet |

そこで彼は七つの花類 (puṣpajāta) を見るとしよう。すなわち, (1) 青蓮 (utpala) (2) 紅蓮 (padma) (3) 黄蓮 (kumuda) (4) 白蓮 (puṇḍarīka) (5) 妙香花 (saugandhika) (6) 柔香花 (mṛdugandhika) (7) [および] 第七の善思花 (atimukta) を。彼はそれらの花類を嗅ぎながらその大きな岩山に登るとしよう。

§8 sa tatra paśyēt catuṣkaḍevaraṃ sopānam | sa tad abhirohet | sa tatra paśyēt pañcāsthūṇaṃ vimānaṃ | sa tatra praviśēt | sa tatra paśyēt paryaṅkaṃ paṭṭīkopetaṃ goṇīkāśṭṛtaṃ tūlikāśṭṛtaṃ bṛhatīkāśṭṛtaṃ citrikāśṭṛtaṃ paṭalīkāśṭṛtaṃ kācalīndaprāvārapratyāstaraṇaṃ (70v5) sōttarocchadapaṭam ubhayatopahitalohitopadhānaṃ nānāpuṣpāvākīrṇaṃ ramaṇīyaṃ | sa tatrābhiniśīded vābhiniḥpadya vā | tasya tatrābhiniśaṅṅasya vābhiniḥpannasya vā caturdiśaṃ śītalā vāyavo vāyeyuḥ |

そこで彼は四段からなる (catuṣkaḍevara) 階段 (sopāna) を見るとしよう。彼はそれを登るとしよう。そこで彼は五つの柱 (sthūna) のある楼閣 (vimāna) を見ると

(27) 八功德水については処々で説かれるが、参考までにひとつ上げると、『俱舍論 (Abhidharmakośa-bhāṣya)』では (Pradhan 1st ed., 160: 14–15), tad dhi pānīyaṃ śītaḷaṃ ca svādu ca laghu ca mṛdu cācchaṃ ca niṣpratīkaṃ ca pibataś ca kaṇṭhaṃ na kṣiṇōti pītaṃ ca kukṣiṃ na vyābādhate とほぼ同文が見られる。

(28) Ms. tad abhirohet.

しよう。そこで彼は入るとしよう。そこで彼は、(1) 敷物 (paṭṭika) を備え、(2) 毛氈 (goṇikā) が敷かれ (āstrīta), (3) 布団 (tūlikā) が敷かれ、(4) 上衣 (brhatikā) が敷かれ、(5) 毛布 (citrikā) が敷かれ、(6) 幕 (patalikā) が敷かれ、(7) カーチャリンダ布が敷かれ、(8) 天蓋が付いていて (sottarocchadapāṭa), (9) 両側に置かれた赤い枕 (upadhāna) があり、(10) 様々な花々が撒かれた、(11) 心地よい座 (paryāṅka) を見るとしよう。そこで彼は座り、あるいは横になるとしよう。そこで座り、あるいは横になった彼に四方から清涼な風が吹いて来るとしよう。

§9 sa tatra śabdān udīrayet | ghoṣaṃ anuśrāvayet | anenāryā anena bhadrāmukhā asyāḥ kṣāranadyāḥ ku(71r1)kūlakūlāyāḥ kaṇṭakopāstaraṇāyās tamaso 'ndhakāratamīsrāyāḥ pratisroto niḥsaraṇam | apare evam āhuḥ | katamena āryāḥ katamena bhadrāmukhā asyāḥ kṣāranadyāḥ kūlakūlāyāḥ kaṇṭakopāstaraṇāyā andhāyās tamaso 'ndhakāratamīsrāyāḥ pratisroto niḥsaraṇam | anye evam āhuḥ | (71r2) eṣo 'pi mārsā na jānāty eṣo 'pi na paśyaty eṣo 'py anayā kṣāranadyā kūlakūlayā kaṇṭakopāstaraṇāyā andhāyās tamasāndhakāratamīsrāyā⁽²⁹⁾ 'nusrota uhyate |

そこで彼が声 (śabda) を出すとしよう。声 (ghoṣa) を聞かせるとしよう。「〔灰河の中を流されている〕みなさん (ārya), この〔私〕は、〔灰河の中を流されている〕善人たちよ (bhadrāmukha), この〔私〕は、岸辺に熱灰があり、棘で覆われ、暗く、闇であり、黒闇〔そのもの〕であるこの灰河の流れから、流れに逆らって出離したぞ。」

[1] 〔灰河の中にいる〕ある者たちはこのように言った。「みなさん、〔灰河の中を流されていた〕いずれの者が、善人たちよ、〔灰河の中を流されていた〕いずれの者が、岸辺に熱灰があり、棘で覆われ、暗く、闇であり、黒闇〔そのもの〕であるこの灰河の流れから、流れに逆らって出離したのですか。」

[2] 〔灰河の中にいる〕別の者たちはこのように言った。「みなさん (mārsā), この〔大声を上げた〕人は〔何も〕知りません。この人は〔何も〕見ていません。この〔大声を上げた〕人も、岸辺に熱灰があり、棘で覆われ、暗く、闇であり、黒闇〔そのもの〕であるこの灰河によって、流れに従って運ばれている

(29) Ms. andhāyās tasmā andhakāratamīsrāyā.

のです。』

§10 *iti hi bhikṣava upameyaṃ kṛtā yāvad evārthasya vijñaptaye | ayañ ca punar atrārtho draṣṭavyaḥ | kṣāra* iti bhikṣavas trayānāṃ pāpakānāṃ a(71r3)kuśalānāṃ vitarkānāṃ etad adhivacanam | tadyathā kāmavitarkasya⁽³⁰⁾ vyāpādavitarkasya vihinsāvitarkasya | **nadī**ti bhikṣavas tīṣṇāṃ trṣṇānāṃ etad adhivacanam | tadyathā kāmatrṣṇāyā rūpatṣṇāyā ārūpyatrṣṇāyāḥ | **kukūlakūleti** ṣaṅṅāṃ adhyātmikānāṃ āyatanānāṃ etad adhivacanam | **andhakā**(71r4)**ratamisrety** avidyāndhakārasyaitad adhivacanam | **mahājanakāya** iti bālaprthagjanānāṃ etad adhivacanam |

実に、比丘たちよ、このような比喩が作られたが、〔次に述べる〕限りの意味を知らせるためである。ここでは次のような意味が理解されるべきである。①「灰 (kṣāra)」とは、比丘たちよ、それは三つの悪なる不善の尋 (vitarka)、すなわち欲尋 (kāma-) と瞋尋 (vyāpāda-) と殺生尋 (vihimsā-) の言い換え (adhivacana) である。②「河 (nadī)」とは、比丘たちよ、それは三つの愛 (trṣṇā)、すなわち欲愛 (kāma-) と色愛 (rūpa-) と無色愛 (ārūpya-) の言い換えである。③「岸边に熱灰がある (kukūlakūla)」とは、それは六内処の言い換えである。④「黒闇 (andhakāratamisrā)」とは無明の闇 (avidyāndhakāra) の言い換えである。⑤「多くの人々」とは、それは愚かな凡夫 (bālaprthagjana) たちの言い換えである。

§11 **ekaḥ sattvo 'bāla-jātīyo 'mūḍha-jātīyaḥ sa prajñajātīya** iti bodhisattvasyaitad adhivacanam | **srota** iti saṃsārasrotasa etad adhivacanam | **hastābhyāṃ pādābhyāṃ pratisroto vyāyachcheyeti vīryārambhasyai**(71r5)**tad** adhivacanam |

⑥「患者の類いではなく、愚鈍の類いではなく、智者の類いの一人の有情」とは、それは菩薩 (bodhisattva) の言い換えである。⑦「流れ (srotas)」とは、それは輪廻の流れ (saṃsārasrotas) の言い換えである。⑧「両手両足で流れに逆らって〔進むべく〕努めよう。」とは、それは精進開始 (vīryārambha) の言い換えである。

§12 **āloka** iti dharmanidhyānakṣānter etad adhivacanam |

⑨「明かり (āloka)」とは、それは法を簡括する忍 (dharmanidhyānakṣānti) の言い

(30) Ms. -vitarkasyā.

換えである。

§13 **samaḥ pṛthivīpradeśa** iti śīlānām etad adhivacanam | **caturdiśaṃ vyavalokanam** iti caturṇām āryasatyānām etad adhivacanam | **mahāsailaḥ parvata** iti samyagdr̥ṣṭer adhivacanam |

⑩「平らな地面」とは、もろもろの戒の言い換えである。⑪「四方を見渡す」とは、それは四聖諦の言い換えである。⑫「大きな岩山」とは、それは正見 (samyagdr̥ṣṭi) の言い換えである。

§14 **aṣṭāṅgopetam pāṇīyam** ity āryāṣṭāṅgasya (71v1) mārgasyaitad adhivacanam | **saptapuṣpajātānīti** saptānām bodhyaṅgānām etad adhivacanam | **catuḥkaḍevaram sopānam** iti caturṇām rddhipādānām etad adhivacanam | **pañcasthūṇaṃ vimānam** iti pañcānām indriyāṇām etad adhivacanam |

⑬「八支を備えた水」とは、それは八正道の言い換えである。⑭「七つの花類」とは、それは七覚支の言い換えである。⑮「四段からなる階段」とは、それは四神足の言い換えである。⑯「五つの柱のある楼閣」とは、それは五根の言い換えである。

§15 **paryaṅkam** iti sopadhiṣeṣanirvāṇadhātor etad adhivacanam | **puṣpāvākīrṇaṃ ramaṇīyam** iti (71v2) dhyānavimokṣasamādhisamāpattīnām etad adhivacanam | **sa tatrābhiniṣaṇṇo vābhiniṣanno veti tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasyaitad** adhivacanam | **caturdiśaṃ śītalā vāyavo vāntīti** caturṇām ādhicaitasikānām dr̥ṣṭadharmasukhavihārāṇām etad adhivacanam |

⑰「座 (paryaṅka)」とは、それは有余依涅槃界 (sopadhiṣeṣanirvāṇadhātu) の言い換えである。⑱「花々が撒かれた、心地よい」とは、それは〔四〕禅 (dhyāna) と〔八〕解脱 (vimokṣa) と〔三〕三昧 (samādhi) と〔八〕等至 (samāpatti) の言い換えである。⑲「そこで座り、あるいは横になった彼」とは、それは如来・阿羅漢・正等覚の言い換えである。⑳「四方から清涼な風が吹いて来る」とは、それは四つの増上心に属する現法楽住の言い換えである。

(31) Ms. -paṇṇo.

(32) Ms. vayavo.

§16 śabdam udīrayati ghoṣam anuśrāvayatīti dharmade(71v3)śanāyā etad adhivacanam |

㊸「声を出すとしよう。声を聞かせるとしよう。」とは、それは法の教示 (dharmadeśanā) の言い換えである。

§17 tatra ye te evam āhuḥ | katamenāryāḥ katamena⁽³³⁾ bhadramukhā asyāḥ kṣāranadyāḥ kukūlakūlayāḥ kaṇṭhakopāstarāṇyā andhāyās tamaso 'ndhakāratamīsrāyāḥ pratisroto niḥsaraṇam iti śāriputramaudgalyāyanayor bhikṣvor etad adhivacanam | pañcakānām upapañcakānām ṣa(71v4)ṣṭer bhadravargīyānām pūgānām etad adhivacanam iti | ye vā punar anye 'pi samyagdrṣṭayāḥ samyakpratipannāḥ |

㊸そこで「みなさん、いずれの者が、善人たちよ、いずれの者が、岸辺に熱灰があり、棘で覆われ、暗く、闇であり、黒闇〔そのもの〕であるこの灰河の流れから、流れに逆らって出離したのですか。」と、このように言う者たちとは、それは舍利弗と目連の二比丘の言い換えである。〔さらに〕それは、五比丘 (pañcaka) と五比丘に続く (upapañcaka) 賢者群六十人の衆 (pūga)⁽³⁴⁾ の言い換えである。あるいは、正しい見解を持ち (samyagdrṣṭi), 正しく理解した (samyakpratipanna) 他の者たちもである。

§18 tatra ye te evam āhuḥ | eṣo 'pi mārṣā na jānāty eṣo 'pi na paśyaty eṣo 'py anayā kṣāranadyā kukūlakūlayā kaṇṭhakopāstarāṇyā andhāyā tamasā andhakāratamīsrāyānusroto uhyata (71v5) iti ṣaṇṇām śāstīṇām etad adhivacanam | tadyathā (1) pūraṇasya kāśyapasya (2) maskariṇo gośālīputrasya (3) saṃjayino vairāṭīputrasya (4) ajītasya kesakambalasya (5) kakudasya kātyāyanīputrasya (6) nirgranthasya jñātīputrasyeti⁽³⁵⁾ | ye vā punar anye 'pi mithyādrṣṭayo mithyāpratipannāḥ |

㊸そこで「みなさん、この人は〔何も〕知りません。この人は〔何も〕見ていません。この人も、岸辺に熱灰があり、棘で覆われ、暗く、闇であり、黒闇〔そのもの〕であるこの灰河によって、流れに従って運ばれているのです。」と、

(33) Ms. katame.

(34) 「六十人の衆」とは、五比丘と、その次に出家したヤシャス (Yaśas) およびヤシャスの友人4人と、さらにそれに続いた50人を併せた計60人の比丘を意味する。

(35) Ms. jātiputrasyeti.

このように言う者たちとは、それは六人の師 (śāstr 六師外道) の言い換えである。すなわち、(1) プーラナ・カーシャパと、(2) マスカリン・ゴーシャーリープトラと、(3) サンジャイン・ヴァイラッティープトラと、(4) アジタ・ケーサカンバラと、(5) カクダ・カートヤーヤニープトラと、(6) ニルグラント・ジャーティープトラである。あるいは、誤った見解を持ち (mithyādr̥ṣṭi), 誤って理解した (mithyāpratipanna) 他の者たちもである。

§19⁽³⁶⁾ iti hi bhikṣavo yat tac chāstrā śrā(72r1)vakāṇām karaṇīyam anukampakena kārūnikenārthakāmena hitaiṣiṇā karuṇāyamānena kṛtaṃ vas tan mayā | yuṣmābhir idānīm karaṇīyam | etāni bhikṣavo ’raṇyāni vṛkṣamūlāni śūnyāgārāṇi parvatakandarāṇi giriguhāpalālapuñjābhyavakāśaśmaśānavanaprasthāni prāntāni śayanāsanāni dhyāyata bhikṣavo mā pramādyata (72r2) mā paścād vipratīsarīṇo bhūta | idam asmākam anuśāsanam || idam avocat ||

実に、比丘たちよ、憐愍心を持ち (anukampaka) 同情心を持ち (kāruṇika) 義利を願い (arthakāma) 利益を求め (hitaiṣiṇ) 慈悲を行う (karuṇāyamāna) 師 (śāstr) が声聞たちに為すべきこと (karaṇīya) を、私はあなた方に為し終わった。今やあなた方も為すべきである。比丘たちよ、阿蘭若 (araṇya) 木の根元 (vṛkṣamūla) 空屋 (śūnyāgāra) 山 (parvata) 峡谷 (kandara) 岩山 (giri) 洞窟 (guhā) 草庵 (palālapuñja) 空地 (abhyavakāśa) 死体捨て場 (śmaśāna) 森の台地 (vanaprastha) といった、これらの辺地 (prānta) を住居として禅定せよ。比丘たちよ、放逸になるな。後で後悔するな。これが私の教えである。

この〔経〕を説き終わった。

5 漢訳『雜阿含』1177 経 (灰河経)

漢訳『雜阿含』の 1177 経 (灰河経) を本稿で提示した梵文テキストに従って 19 節に分けて提示する (第 2 卷 316c-317b)。大正藏経に附されている句読点は変更した。改めて述べると、第 12 節が『大乘莊嚴経論』の引用である。先に述べ

(36) この節は『毒蛇経』の最終節と同じ定型句である。松田和信・出本充代・上野牧生 (他) 2022: 64 参照。

た第11節の「菩薩摩訶薩」以外に注意すべき点を挙げると、第2節の「衆多罪人」も気にかかる表現ではあるが、梵文では「多くの人々 (mahājanakāya)」とあるにすぎず、第10節の言い換えの箇所では「衆多人」として引用され、「罪」の語は存在しない。第15節の「無余涅槃」は梵文では「有余依涅槃」となっている⁽³⁷⁾。後述のチベット語訳は梵文と同じ「有余依涅槃」である。さらに先に述べたように、最後の第19節では「如前篋毒蛇説」とあって文章を省略するが、第19節が1177経に先立つ兄弟經典の1172経(毒蛇経)と同文だからである。第19節の全体は阿含經典に見られる定型句 (stock phrase) のひとつであって⁽³⁸⁾、この一節が『毒蛇経』に繋がる何らかの『灰河経』独自の思想に関係するものではない。今述べた語には下線を付した。なお、梵文やチベット語訳と漢訳が相違する点(漢訳が何らか思想的に展開したヴァージョンであるように見える点)については、漢訳を行ったインド僧の求那跋陀羅が暗唱していたインド語原典にまで遡る相違であるのか、漢訳時あるいは漢訳後の改変・追加であるのか判断は難しいが、「有余依涅槃」が「無余涅槃」とされている箇所を除いて、松田は後者の可能性の方が高いのではないかと考える。

- §1 如是我聞。一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。
- §2 譬如灰河，南岸極熱，多諸利刺，在於闇處。衆多罪人在於河中，隨流漂沒。
- §3 中有一人。不愚不癡，聰明黠慧。樂樂厭苦，樂生厭死。作如是念。「我今何緣在此灰河。南岸極熱，又多利刺，在闇冥處，隨流漂沒。我當以手足方便逆流而上。」
- §4 漸見小明。其人默念。「今已疾強見此小明。復運手足勤加方便。」
- §5 遂見平地。即住於彼。觀察四方。見大石山，不斷不壞，亦不穿穴。即登而上。

(37) 『毒蛇経』でも、漢訳では「無余涅槃」とある箇所が梵文では「有余依涅槃」となっている。松田和信・出本充代・上野牧生(他)2022: 72-73, n. 73, 75参照。

(38) 同上: 64, n. 53参照。阿含經典ではないが、*Arthaviniścaya-sūtra*の末尾もこの定型句の後半と同文である(N. H. Samtani ed., p. 69)。

- §6 復見清涼八分之水，所謂冷，美，輕，軟，香，淨，飲時不噎，咽中不闕。飲已安身。即入其中，若浴若飲，離諸惱熱。然後復進大山上。⁽³⁹⁾
- §7 見七種華，謂優鉢羅華，鉢曇摩華，拘牟頭華，分陀利華，修提提華，彌離頭提提花，阿提目多花。聞花香已，復上石山。
- §8 見四層階堂，即坐其上。見五柱帳，即入其中，斂身正坐，種種枕褥，散花遍布，莊嚴妙好。而於其中，自恣坐臥。涼風四溱，令身安隱。
- §9 坐高林下，高聲唱言。「灰河衆生諸賢正士。如彼灰河，南岸極熱，多諸利刺，其處闇冥。求出於彼河中。」有聞聲者，乘聲問言。「何方得出。從何處出。」其中有言。「汝何須問何處得出。彼喚聲者亦自不知。不見從何而出。彼亦當復在此灰河，南岸極熱，多諸利刺，於闇冥中，隨流來下。」
- §10 是比丘。我說此譬。今當說義。灰者，謂三惡不善覺。云何三。欲覺恚覺害覺。河者，謂三愛。欲愛色愛無色愛。南岸極熱者，謂內外六入處。多諸利刺者，謂五欲功德。闇冥處者，謂無明障閉慧眼。衆多人者，謂愚癡凡夫。流，謂生死河。
- §11 中有一人不愚不癡者，謂菩薩摩訶薩。手足方便逆流上者，謂精勤修學。
- §12 微見小明者，謂得法忍。
- §13 得平地者，謂持戒。觀四方者，謂見四真諦。大石山者，謂正見。
- §14 八分水者，謂八聖道。七種花者，謂七覺分。四層堂者，謂四如意足。五柱帳者，謂信等五根。
- §15 正身坐者，謂無餘涅槃。散花遍布者，謂諸禪解脫三昧正受。自恣坐臥者，謂如來應等正覺。四方風吹者，謂四增心，見法安樂住。
- §16 擧聲唱喚者，謂轉法輪。
- §17 彼有人問。「諸賢正士何處去何處出」者，謂舍利弗，目犍連等，諸賢坐比丘。
- §18 於中有言。汝何所問。「彼亦不知不見有所出處。彼亦當復於此灰河，南岸極熱，多諸利刺，於闇冥處，隨流來下」者，謂六師等諸邪見輩，所謂富蘭那迦葉，末伽梨瞿舍梨子，散闍耶毘羅胝子，阿耆多枳舍欽婆羅，伽拘羅迦延延，

(39) 元・明本では「然後復進，登大山上」とあるが，大正蔵の校訂を修正する必要はないと思われる。

尼捷連陀闍提弗多羅，及餘邪見輩。

§19 如是比丘。大師爲諸聲聞所作，我今已作。汝今當作所作。如前篋毒蛇說。
佛說此經已。諸比丘聞佛所說，歡喜奉行。

〔附〕 原型カンギュル (Proto-Kanjur) のチベット語訳『灰河経』

2015年、ウィーン大学のヘルムート・タオシャー (Helmut Tauscher) は、西ヒマラヤのゴンドラ (Gondhla) とトリン (Tholing) に写本の形で伝えられていたチベット大蔵経の原型カンギュル (Proto-Kanjur) の中に、版本のカンギュルには収録されていない *Lan tsha'i chu bo'i mdo* (塩の河の経) というタイトルの翻訳が含まれていることを明らかにした。⁽⁴⁰⁾ 彼は親切にも両方の写真を本稿共著者のイエンス＝ウヴェ・ハルトマンに提供してくれた。ゴンドラ写本にも、トリン写本にも梵語のタイトルは附されていないが、*Lan tsha'i chu bo'i mdo* が梵語の *Kṣāranadī-sūtra* の訳語であることは間違いのないであろう。⁽⁴²⁾ また、その内容についても、第27三啓経の第2ダンダ、つまり梵文『灰河経』とこのチベット語訳を比較すると、単語や文章の順番が種々相違するなど、両者は完全に同一というわけではないものの、非常に近いことは明らかである。

ゴンドラ写本とトリン写本のどちらのチベット語訳も *Lan tsha'i chu bo'i mdo* のタイトルと、*sangs rgyas la phyag 'tshal lo* (ブツダに帰命する) という敬辞で始まり、タイトルと翻訳者名を示す短い奥書で終わる。⁽⁴³⁾ 奥書に示される翻訳者の

(40) Tauscher 2015: 377–379 参照。タオシャーはこれより以前にゴンドラの原型カンギュルの目録も出版している (Tauscher 2008)。*Lan tsha'i chu bo'i mdo* については 87 頁参照。さらに Bruno Lainé と共同でゴンドラとトリンの両原型カンギュルについての概説も出版している (Tauscher & Lainé 2008: 346–350) *Lan tsha'i chu bo'i mdo* については 357 頁参照。

(41) 現在では、両者のうち、ゴンドラ写本は BDRC の BUDA のサイト (<https://library.bdrc.io>) から閲覧可能である。ゴンドラ写本の目録 (Tauscher 2008) を見ると、ゴンドラの原型カンギュルには、『灰河経』以外にも、版本のカンギュルには含まれていない翻訳が多く収録されている。その中には正体不明の文献も複数認められ、それらがいかなるインド文献の翻訳であるかを明らかにすることは今後の大きな研究課題になるように思える。

(42) Hartmann 2022b も参照。

Dar ma pa la と Ye shes brtson 'grus はいずれも他の翻訳では知られていない。なおトリン写本は、| *bsod nams bdag gis gang 'thob pa* || *sems can kun kyis thob gyurd cig* | (私が得る功德がすべての有情によって得られますように!) という短い献辞を末尾に追加する。両者の翻訳は、 Gondra 写本では *u rgyan mdo*, vol. *ka*, fol. 9r9-11r7 に含まれ、トリン写本では vol. *kha*, fol. 66r6-67v10 に含まれている。どちらの写本もウチェン体を用いて古い正書法で書かれているが、一貫性は見られない。例えば、dge は dge' と、bzhi は bzhi' と、mdo は mdo' とランダムに交替する。誤記や欠落あるいは非正規形の綴りの数はトリン写本より Gondra 写本の方が明らかに多い。

以下に本稿の梵文テキストに従って 19 節に分けたローマ字テキストを提示する。フォリオ番号と行については、Gondra 写本を [] で、トリン写本を () で示す。句読点については断りなく標準化して示した。なお、ここでは精密なチベット語訳校訂テキストを作成しようとしたわけではないので、両写本間に見られる文章の読解に無関係な些細な相違は注記しない。

§1 'di skad bdag gis thos pa'i dus cig na | bcom ldan 'das mnyan tu yod pa na [9r10] rgyal bu rgyal byed kyi 'tshal 'gon myed zas sbyin kyi kun dga' ra ba na bzhugs (66r7) te | de nas bcom ldan 'das kyis dge slong nams la bka' bstsal pa |

§2 dge' slong dag 'di lta ste | lan tsha'^[1] chu bo'i ngogs sam 'gram dag las gang tsher ma can gyi chu skor yod la | der mun pa mun [9v1] gnag smag tu 'thoms pa'i skye dgu (66r8) lus can kun kyang chu bo'i rgyun phyogs su khyer zhing ded de las rgal myi nus so ||

[1] *tsa'i* G. [2] *chu skor* T: *chus skong ba* G. [3] *thogs* G. [4] *dgu'* T: *bu* G. [5] *bzhung* G. [6] *ded* T: *de's* G. [7] *de de* T.

§3 de dag las sems can gcig cig byis pa ma yin pa'i rigs can | rmongs pa ma yin pa'i rigs can | yang dag pa'i shes rab dang ldan pa'i [9v2] rigs can | bde ba'i lus dang bcas

(43) Gondhla 11r7-8; Tholing 67v9-10. *lan tsha'i* (*tsa'i* G) *chu bo'i mdo* (*mdo'* T) *rdzogs sho* || || *rgya gar gyi khan po* (*khan po* G, *dge slong* T) *dar ma pa la dang* || | *dge' slong ye shes brtson* (*rtson* G) *'grus gyis sgyurd* (*gyur pa* G).

pa zhid byung (66r9) ba de ni | ji ltar yang bdag la lan tsha'i chu bo'i ngogs sam |
'gram dag las gang tsher ma can gyi chu skor der mun pa mun gnag smag tu gyurd
cing 'thoms nas chus khyer ba ni myi rigs [9v3] te | sdug sngal zhing myi 'chi ba
dang | myi mthun no || bdag (66r10) 'tsho bar 'dod kyi 'chi bar myi 'dod do || de'i
phyir lag pas nyug cing rkang pas brad de lan tsha'i chu bo las rgal ba'i bya ba bya'o
snyam mo || de nas de nyid [9v4] kyis lag pas nyug pa dang | rkang pas brad pa
grangs du ma'i rkyen kyis bya ba byas pas lan (66v1) tsha'i chu bo'i rgyun las rgald
pa dang |

§4 ji ltar snang bar gyurd cing mthong ba na | des 'di ltar phan pa chen po yod pas |
ngas ni yang dang yang du lan tsha'i chu bo'i rgyun la lag pas nyug cing rkang pas
brad pa'i bya ba byas na nyams su blangs par 'gyur bas lag (66v2) pas nyug cing
rkang pas brad pa'i bya ba byas pas

§5 lan tsha'i chu bo'i rgyun sa yul dang mnyam par de bzhin mthong ste 'dug go ||
des der 'dug pa dang | phyogs bzhir yang [9v5] lta bar gyurd pa na des ji ltar ri chen
po sra ba shin tu mkhregs pa gcig tu stug (66v3) pa | bug pa 'am | gas pa myed pa
gnam la reg pa zhid kyang snang bar gyurd la | des de mthong ste der song ste bgrod
[9v6] de phyin pa dang |

§6 chu myig yan lag brgyad dang ldan pa zhid kyang yod pa mthong ngo || de ni ma
brnyogs pa yin | dangs pa yin | (66v4) bsil ba yin | yang ba yin | dri nga ba myed pa
yin | dri bsung dang ldan zhid zhim pa yin | btung bar myid pa la mgyogs pa yin |
myid nas lto ba la bde zhid nad seld par 'gyur ba dag go || des der khru kyang byas
'thungs pas nad dang bral (66v5) la gdung ba gsal nas ri chen po [9v7] 'dzeg cing
song ba na |

§7 des me tog gi rigs bdun po 'di 'dra ba dag kyang mthong ste | de yang 'di lta ste |
ud pa la dang | pad ma dang | ku mu ta dang | pun da ri ka dang | dri bsung ldan dang |
[9v8] dri zhim dang | (66v6) a di muk ta^[1] dag mthong ste | der 'dug nas | blang ste |
snom par yang byed do || de yang ri de la 'dzeg cing song ba dang |

[1] *a di mu ka <ta>* G: *a di mug {ka} ta* T.

§8 kha dog dang | dbyibs su ldan pa'i skas bzhi dag kyang mthong ste [9v9] de la
'dzeg go || des der 'dzeg (66v7) cing song ba dang | ka ba lnga dang ldan pa'i gzhal

myed khang zhig kyang mthong ngo || de'i nang de na khri stan gnas mal mdab ma dang | dre'u rngog dang | srin bal nang tshangs [9v10] can dang | seng ras dang | mon dar dang | ka ling ka'i bstan dang | za bog dang | (66v8) gding ba dang | steng du gding ba dang | sngas dmar po bzhag pa yang mthong nas de de lta bu la 'dug cing nyal bar [10r1] byed do | tho phyi na me tog sna tshogs bkram pa shin tu dga' ba'i gnas kyang mthong nas 'dug cing nyal ba dang | ji ltar nyal (66v9) zhing nyal ba na phyogs bzhi nas bsil ba'i rlung gi ngad kyang ldang ngo ||

§9 des 'di [10r2] skad ces sgra bsgrags nas thos par bya ba ni | 'di ni 'phags pa'o | 'di ni sgo bzang po'o | 'di ni lan tsha'i chu bo'i ngogs sam 'gram dag las | gang (66v10) tsher ma can gyi chu skor yod la gang mun pa mun gnag smag tu gyurd pa 'thoms [10r3] te | chu bo'i rgyun phyogs su khyer te ded pa las zlog shig ces cig po des smras pa dang | gzhan mang po dag phyr lan 'di skad ces smras te | 'phags pa zhes bya ba (66v11) ci | sgo bzang po zhes bya ba gang | lan tsha'i chu bo'i ngogs [10r4] sam 'gram dag las gang tsher ma can gyi chu skor yod la gang mun pa mun gnag smag tu gyurd pa 'thoms te | chu bo'i rgyun phyogs su khyer zhing de rgal myi nus pa las bzlog shig ces bya ba (67r1) 'di ni | 'di ni sems can chen po myi shes [10r5] so || myi mthong ngo || de lta bas na lan tsha'i chu bo'i rgyun gyi ngogs sam 'gram dag las gang tsher ma can gyi chu skor yod la gang mun pa mun gnag smag tu gyurd pa 'thoms te chu bos rgyun (67r2) phyogs su ded de khyer [10r6] na khyer du bas so zhes gsol bar byed do ||

§10 dge slong dag de'i phyr dper byas pa'i don 'di ltar blta bar bya'o || lan tsha ni sdig pa dang | myi dge' ba dang | de la rtog pa dang | gsum po de [10r7] dag go zhes nga smra'o || ji ltar 'dod (67r3) pa la spyod pa dang | gnod sems la spyod pa dang | rnam par 'tshe ba la spyod pa gsum po dag ni sred pa can yin pas chu bo zhes nga smra'o || sred pa ni 'dod pa'i [10r8] sred pa dang | gzugs kyi sred pa dang | gzugs myed pa'i sred pa ni rgyun tu 'bab pa'o (67r4) ngogs dang 'gram zhes bya ba ni nang gi skye mched drug dang | phyi'i skye mched drug go zhes nga smra'o || 'tsher ma can gyi chu skor zhes bya ba [10r9] ni 'dod pa'i yon tan lnga'o zhes nga smra'o || mun pa mun gnag smag tu gyurd pa ces bya ba gang yin pa de ni ma rig pa zhes nga smra'o | (67r5) skye dgu'i lus can mang po zhes bya ba ni gang byis pa so so'i skye bo dag yin zhes nga smra'o ||

§11⁽⁴⁴⁾ [10r10] chu bo rgyun ces bya ba ni sred pa ni khor ba'i chu bo zhes nga smra'o ||
sems can gcig byis pa ma yin pa'i rigs can | rmongs pa ma yin pa'i rigs can | (67r6)
yang dag pa'i shes rab dang ldan pa'i rigs can [10v1] gang yin pa de ni byang chub
sems dpa' zhes nga smra'o || lag pas nyug cing rkang pas brad de chu bo'i rgyun la
bya ba byed pa ni zhes bya ba ni brtson 'grus brtsams pa zhes nga smra'o ||

[1] read 'khor?

§12 snang ba zhes (67r7) bya ba ni chos kyi ster bzod pa [10v2] yin no zhes nga smra'o ||

§13 sa yul dang mnyam pa zhes bya ba ni tshul khirms dang ldan pa zhes nga smra'o ||
phyogs bzhir bltas shes bya ba ni 'phags pa'i bden pa bzhi yin zhes nga smra'o || ri
chen po sra ba zhes (67r8) bya ba ni [10v3] yang dag pa'i lta ba yin zhes nga smra'o ||

§14 yan lag brgyad dang ldan pa'i chu zhes bya ba ni 'phags pa'i lam yan lag brgyad
yin zhes nga smra'o || me tog gi rigs bdun zhes bya ba ni byang chub kyi yan lag
bdun yin [10v4] zhes nga smra'o || (67r9) them skas bzhi zhes bya ba ni rdzu 'phrul
gyi rkang pa bzhi yin zhes nga smra'o || ka ba lnga dang ldan pa'i gzhal myed khang
zhes bya ba ni dbang po lnga yin no zhes nga smra'o ||

§15 khri stan zhes bya ba ni phung po lhag ma [10v5] dang bcas pa'i mya ngan las
'das pa dang | (67r10) phung po lhag ma myed pa'i mya ngan las 'das pa zhes nga
smra'o || me tog sna tshogs bkram pa zhes bya ba ni bsam gtan dang | ting nge 'dzin
dang | nang du [10v6] yang dag par 'jog pa dang | nam par thard pa yin no zhes nga
smra'o || ji ltar (67r11) gang nyal ba dang 'dug pa zhes bya ba ni | de bzhin gshegs
pa dgra' bcom pa yang dag par rdzogs [10v7] pa'i sangs rgyas yin zhes nga smra'o ||
phyogs bzhi' nas rlung bsil ba'i ngad ldang ba zhes bya ba ni | bde ba'i gnas la 'dug
ste | ting nge 'dzind (67v1) bzhi bsam par bya zhing chos kyang mthong bar byed pa
yin zhes [10v8] nga smra'o ||

§16 sgra bsgrags nas thos par byed ces bya ba ni chos bstand pa yin zhes nga smra'o ||

§17 ji ltar gzhan dag kyang 'phags pa zhes bya ba gang | sgo bzang po zhes bya ba
gang | lan tsha'i (67v2) chu bo'i [10v9] ngogs sam 'gram dag las gang tsher ma can

(44) 第11節を構成する文章は梵文テキストと文章の順序が異なるが、ストーリー展開から判断すると梵文テキストおよび漢訳の方が本来の順序であろう。

gyi chu skor yod la | gang mun pa mun gnag smag tu gyurd pa 'thoms pa | chu bo'i rgyun phyogs su ded cing khyer ba las sgröl zhing bzlog pa ni | ji ltar sha ri'i bu dang [10v10] me'u 'gal gyi bu las (67v3) stsogs pa dge' slong dag la yang nga smra'o | | sten lnga dang | nye lnga dang | bzang sde drug bcu dang | gzhan yang skyes bu yang dag pa'i lta ba la bzhugs shing gnas pa de dag la nga [11r1] smra'o | |

§18 gzhan yang 'di lta ste | 'od srung rdzogs byed dang | kun tu (67v4) rgyu nags lhas kyi bu dang | smra 'dod kyi bu mo'i bu yang dag rgyal ba can dang | myi 'pham skra'i la ba can dang | ka tya'i bu nog can dan | [11r2] lcer bu pa gnyen gyi bu dag ste | phyi'i rig pa ston pa | log par lta ba la zhugs pa 'di dag 'di skad ces smras te | 'di (67v5) lta bu lan tsha'i chu bo'i ngogs sam 'gram dag las gang tsher ma can gyi chu skor yod [11r3] la gang mun pa mun gnag smag tu 'thom pa chu bo'i rgyun phyogs su khyer zhing ded de rgal myi nus pa las phyir zlog shig ces bya ba 'di | drang srong chen po 'di myi 'tshald to | | (67v6) 'di lta bu ma mthong lags so zhes [11r4] smra'o | |

§19 dge' slong dag ston pa'i nyan thos pa dag gis bya bar bya ba ni snying brtse zhing phan par bya ba dang | don 'dod cing snying rje dang ldan pa'i bya ba ngas byas pa ltar | khyod kyis kyang de ltar bya ba gyis shig | dge' (67v7) slong dag ji ltar dgon [11r5] pa dang | shing drung dan | khang stong dang | ri dang | ri bo dang | ri bo che'i phug dang | rtsa'i khrod dang | bla gab myed pa dang | dur khrod dang | nags mdab dang | bas mtha'i gnas su gnas par bya [11r6] zhing | bsam gtan bya (67v8) 'o | | dge' slong dag bag yod par gyis shig | | phyis gdungs par 'ong ngo | | 'di ltar ngas khyed la bstand to zhes bcom ldan 'das kyis bka' btsal [11r7] pa dang | dge' slong dag yid rangs te | rab tu dga'o | |

〈参考文献〉

- Brekke, Torkel.** 2000. "The Caṅgīsūtra of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādins." *Manuscripts in the Schøyen Collection*. eds. Jens Braarvig, Jens-Uwe Hartmann, Kazunobu Matsuda and Lore Sander. Volume I: 53–64. Oslo.
- Hartmann, Jens-Uwe.** 2002. "More Fragments of the Caṅgīsūtra." *Manuscripts in the Schøyen Collection*. eds. Jens Braarvig, Paul Harrison, Jens-Uwe Hartmann, Kazunobu Matsuda and Lore Sander. Volume II: 1–16. Oslo.
- . 2007. "Der Sattvārādhanaśtava und das Kṣāraṇadīsūtra." *Pramāṇakīrtiḥ, Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday, Part I* (WSTB 70.1), eds. B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M. T. Much and H. Tauscher:

247–257. Wien.

- **2022a.** “Trauer um die Großmutter und Trost vom Buddha: Das *Āryikā-sūtra*.” *Connecting the Art, Literature, and Religion of South and Central Asia; Studies in Honour of Monika Zin*, eds. Ines Konczak-Nagel, Satomi Hiyama and Astrid Klein, New Delhi, DEV Publishers & Distributors: 153–160.
- **2022b.** “The (Re-) Appearance of the “Discourse on the Salt River” (*Kṣāranadī-sūtra*).” *Guruparamparā. Studies on Buddhism, India, Tibet and More in Honour of Professor Marek Mejer*, eds. Katarzyna Marciniak, Stanisław Jan Kania, Agata Bareja-Starzyńska and Małgorzata Wielińska-Soltwedel. Warsaw.
- **Forthcoming 1.** “Forms of Intertextuality and Lost Sanskrit Verses of the *Buddhacarita*: the *Tridaṇḍaka* and the *Tridaṇḍamālā*.” *Festschrift for Gregory Schopen*, eds. D. Boucher and S. Clarke.
- **Forthcoming 2.** “A Composite Manuscript from Qizil (SHT 191) and the *Tridaṇḍamālā*.” *Studia Indica. Festschrift Duan Qing*, eds. Ye Shaoyong, Zhang Xing and Fan Jingjing.
- Hartmann, Jens-Uwe & Matsuda, Kazunobu.** **Forthcoming 1.** “The Case of the Appearing Poet: New Light on Aśvaghōṣa and the *Tridaṇḍamālā*.” *Buddhakṣetrapariśodhana: Festschrift for Paul Harrison*, in *Indica et Tibetica*, eds. Charles DiSimone and Nicholas Witkowski, Marburg.
- **Forthcoming 2.** “Possible Fragments of Aśvaghōṣa’s Lost *Sūtrālamkāra* from the “Manuscript Cave” in Šorčuq.” *Festschrift for Eli Franco*. eds. Hiroko Matsuoka, Shinya Moriyama and Tyler Neil.
- Hartmann, Jens-Uwe, Matsuda, Kazunobu & Szántó, Péter-Dániel.** **2022.** “The Benefit of Cooperation: Recovering the Śokavinodana Ascribed to Aśvaghōṣa.” *Dharmayātrā: Felicitation Volume in Honour of Venerable Tampalawela Dhammaratana*, ed. Mahinda Deegalle, Paris, Nuvis Press: 173–180.
- Hartmann, Jens-Uwe & Maue, Dieter.** **Forthcoming.** “Ein sanskrit-ugurisches Fragment der *Tridaṇḍamālā* in Brāhmī-Schrift Reedition des Texts TT VIII D.” *Acta Asiatica Varsoviensia*.
- Hartmann, Jens-Uwe, Wille, Klaus & Zieme, Peter.** **2022.** “Aśvaghōṣa’s *Buddhacarita* in the Old Uigur Literature.” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2021*, Vol. 25: 173–189.
- Johnston, E. H.** **1936.** “The Buddha’s Mission and last Journey: *Buddhacarita*, xv to xxviii.” *Acta Orientalia* 15: 26–111 & 231–292.
- Lévi, Sylvain.** **1907.** *Mahāyāna-sūtrālamkāra*, Tome I. -Texte. Paris.
- **1911.** *Mahāyāna-sūtrālamkāra*, Tome II. -Traduction. -Introduction. -Index. Paris.
- Matsuda, Kazunobu.** **2022.** “Sanskrit Text of the *Śivapathikāsūtra* in the *Madhyamāgama*.” *Guruparamparā. Studies on Buddhism, India, Tibet and More in Honour of*

Professor Marek Mejer, eds. Katarzyna Marciniak, Stanisław Jan Kania, Agata Bareja-Starzyńska and Małgorzata Wielińska-Soltwedel. Warszawa.

- Tauscher, Helmut.** 2008. *Catalogue of the Gondhla Proto-Kanjur*, WSTB, 72, Wien.
- 2015. “Manuscripts en route.” *Cultural Flows across the Western Himalaya*, ed. Patrick McAllister, Cristina Scherrer-Schaub, Helmut Krasser, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften: 365-392.
- Tauscher, Helmut, & Lainé, Bruno** 2008. “Western Tibetan Kanjur Tradition.” *The Cultural History of Western Tibet, Recent Research from the China Tibetology Research Center and the University of Vienna*, ed. Deborah Klimburg-Salter, Liang Junyan, Helmut Tauscher, Zhou Yuan, WSTB, 72: 339-362. Wien.
- 上野牧生** 2015 「アシュヴァゴーシャの失われた莊嚴經論」『インド論理学研究』8: 203-234.
- 2020 「第29三啓經（八難經）の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111: (21)-(46).
- 2021 「増一阿含の二經典（1）—第30三啓經（五事經）の梵文テキストと和訳—」『大谷学報』101-1: (1)-(28).
- 2022 「増一阿含の二經典（2）—第36三啓經（不堅經）の梵文テキストと和訳—」『大谷学報』102-1: (1)-(16).
- 上野牧生・松田和信** 2021 「アシュヴァゴーシャからヴァスヴァンドウへ——釈軌論と俱舍論に見る法滅観と馬鳴の詩作品——」『仏教学セミナー』113: (51)-(72).
- 榎本文雄** 1984 「阿含經典の成立」『東洋学術研究』23-1: 93-108.
- 小谷信千代** 1984 『大乘莊嚴經論の研究』文栄堂.
- 梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己** 1985. 『ブツダチャリタ』原始仏典第10巻, 講談社. 2019年4月に講談社学術文庫2549『完訳ブツダチャリタ』として再刊。
- 三枝充恵** 1981 「概説—ボサツ, ハラミツ」『講座・大乘仏教（1 大乘仏教とは何か）』春秋社: 89-152.
- 杉本卓洲** 1964 「四部ニカーヤ四阿含に現われたボサツ」『印度学仏教学研究』12-1: 166-169.
- 津田明雅** 2011a 「*Sattvārādhana* について」*Acta Tibetica et Buddhica* 4: 73-108.
- 2011b 「*Kṣāranadī* という謎の經典について」『印度学仏教学研究』60-1: (124)-(130).
- 2019 『ナーガールジュナの讃歌—諸作の真偽性とあわせて—』起心書房.
- 長尾文庫・長尾重輝** (編) 2007 『大乘莊嚴經論 和訳と注解—長尾雅人研究ノート—(2)』京都.
- 西義雄** 1975 『阿毘達磨仏教の研究』国書刊行会.
- 能仁正顕** 2002 「菩薩思想の形成と展開」『親鸞と人間：光華会宗教研究論集』3: 183-222.
- 早島理** 1982 「Dharmanidhyānakṣānti」『印度学仏教学研究』31-1: (59)-(62).

- 袴谷憲昭・新井裕明 1993『大乘莊嚴經論（新国訳大蔵経 瑜伽・唯識部 12）』大蔵出版。
- 平川彰 1968『初期大乘仏教の研究』春秋社。
- 平川彰 1989『初期大乘仏教の研究 I』平川彰著作集，第3巻，春秋社。
- 藤田祥道 2005/2006「大乘の諸経論に見られる大乘仏説論の系譜（1）『般若経』—「智慧の完成」を誹謗する菩薩と恐れる菩薩」『インド学チベット学研究』9・10合併号，1-55。
- 松田和信 2011「ウダーナヴァルガのギルギット写本」『佛教大学仏教学部論集』95: 17-32。
- 2019「三啓集（*Tridandamālā*）における勝義空経とブッダチャリタ」『印度学仏教学研究』68-1: 1-11。
- 2020a「ブッダチャリタ第15章「初転法輪」—梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』25: 27-44。
- 2020b「大智度論におけるアシュヴァゴーシャー如来十号論に埋め込まれた莊嚴経論—」『印度学仏教学研究』69-1: (53)-(61)。
- 2020c「バーミヤーン出土仏教写本研究の二十年」『東洋学術研究』59-2: 146-170。『シルクロード研究論集』第1巻「仏教東漸の道—インド・中央アジア篇」公益財団法人東洋哲学研究所編（2023，3）に再録。
- 2021a「不浄観を説く中阿含 139 経—三啓集から回収された梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』26: 63-81。
- 2021b「大智度論におけるアシュヴァゴーシャー戒論に埋め込まれた莊嚴経論—」『印度学仏教学研究』70-1: (61)-(69)。
- 2022a「アシュヴァゴーシャ・アンソロジー—鳩摩羅什訳文献に見られる馬鳴の詩作品—」『佛教大学仏教学部論集』106: 19-36。
- 2022b「出曜経と大智度論共通の馬鳴偈について」『印度学仏教学研究』71-1: (45)-(53)。
- 2023「ブッダチャリタ・アンソロジー—失われた詩を梵文三啓集写本に求めて—」『佛教大学仏教学部論集』107: 65-84。
- 松田和信・出本充代・上野牧生・田中裕成・吹田隆徳 2022「毒蛇の喩え—第26 三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』27: 47-78。
- 2023「ごみの山に終わる華鬘の喩え—第5 三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』28: 53-78。